

かこさとし（加古里子）の科学絵本に関する一考察

— 科学の絵本 10 巻シリーズ 8 作品を中心に —

A Study on Scientific Picture Books for Children by Kako Satoshi
— Focusing on 8 scientific picture books in a 10-volume set —

宮川晴美*
Harumi MIYAKAWA

要約 著名な絵本作家かこさとしは自身が科学者であることから科学の絵本を数多く製作している。その200冊余りの科学絵本をテーマに分類して傾向をとらえてみた。専門である工学の分野以外に医学の分野が多くあることがわかった。本稿では、かこさとしが作家活動全般に渡り数年ごとに作成していった、10巻ごとのシリーズ8作品について、科学の何をどう表現したのかを明らかにする。子どもに如何に伝えているのかそれぞれの絵本についての独自性、独創性を述べる。また実際に低学年児童にシリーズ1の中から数冊、読み聞かせを行った時の子どもの声を記録し分析も行った。

キーワード：かこさとし、科学絵本、10巻シリーズ8作品、子ども

Abstract Picture book writer Kako Satoshi left over 600 works in his 60-year life as a writer. He won numerous awards and was nominated as a Japanese representative for the International Andersen Prize Painter Award at the age of 85 in 2011. He was someone who crafted the history of Japanese picture books for children. The purpose of this work was to ascertain how more than 200 scientific picture books by Kako Satoshi, a picture book writer and scientist, conveyed the definition of science to children and how they expressed science in an easy-to-understand manner. This work describes the uniqueness and originality of his 8 scientific picture books in a 10-volume set that he regularly issued.

Key words : Kako Satoshi, scientific picture book, 8 scientific picture books in a 10-volume set, young children

はじめに

絵本作家かこさとし（加古里子）は、産経児童出版文化賞大賞他20以上の賞を受賞し、2011年85歳で国際アンデルセン賞画家賞に日本代表としてノミネートされた。60年に及ぶ作家生活で600以上の作品を残し、日本の絵本の歴史を作った一人と言える。

本研究の目的は絵本作家でありまた科学者でもある、かこさとしの200冊以上の科学絵本は子どもたちに科学の何を伝えたのか、科学をわかりやすく述

べるため、どのような表現方法を使っているのかを明らかにすることである。

まず、かこさとしの科学絵本200冊余りのテーマの傾向を調べるために、科学絵本をノンフィクションとして日本十進分類法（NDC）による分類を行う。そして彼が60年間にわたり定期的に書き続けた科学の絵本10巻シリーズの8作品について、その独自性や独創性を述べる。また実際に小学校低学年の児童に、かこさとしの科学絵本の読み聞かせも行い子どもの反応記録を分析する。

1. かこさとしのデビュー作は科学の絵本

かこさとしは福井県生まれ、本名は中島哲である。

* 元家政学研究科児童学専攻
Former Department of Child Science, Graduate School of Home Economics

大学1年のときに敗戦となり出征した仲間は皆戦死して、生き残ったというより死にはぐれた己はこれから何をすればいいのかという心の葛藤を経てから、次のようなきっかけで子どもに絵本を書くようになる。

大学で偶然見て入った演劇研究会の活動が活路を開いた¹⁾。鈴木²⁾によると東大演劇研究会で自作の「夜の小人」を上演、この作品は合唱付きで上演され、合唱の作曲は大中恩³⁾によるものである。ここで出会った小学生数百人の反応に衝撃を受けて、子どもの心をつかむ術を学びたいと思い児童文化研究への道を歩き始める。

大学卒業後、会社勤めをしながら人形劇団やセツルメント活動の子ども会で子どもの行動記録をつけたり紙芝居などを行ったりした。36歳で工学博士⁴⁾40歳で技術士(化学)を取得し科学者としての一面を持つ。47歳で退社し絵本作家として独立した。

1959年33歳のときデビュー作『だむのおじさんたち』(「こどものとも」34号)を福音館書店から刊行する。この絵本には発電所をつくるために、何年もかかったダム工事の様子が描かれている。またそれをつくった人々の苦労や喜びや悲しみ、労働というものすばらしさについても書かれている。科学的な真実さと人間味を合わせ持つところが特徴的な科学の絵本である。

2. かこさとしの科学絵本

本稿の科学の絵本10巻シリーズ8作品は、かこさとしの主な科学絵本の製作の合間に継続的に描かれていたものである。主な科学絵本には次のような作品が挙げられる。

福音館の科学シリーズ1作目の『海』がインターネット書店「アマゾン」の売れ筋ランキングで「海洋学」分野の第1位(2017)となった⁵⁾。同じく福音館書店の『はははのはなし』は、トーハンの「ミリオンぶっく」で一昨年は120万部、昨年は121万部のミリオンセラーとなっている。また社会科学の側面から、自ら現地取材を行った世界遺産を、何年もかけて科学絵本として作り上げた作品に日本の『ならの大仏さま』、エジプトの『ピラミッド』、中国の『万里の長城』などがあげられる。

かこさとしの科学絵本は合計で約200冊にもほなる。それらの作品の科学のテーマを知るために分野別分類を行ってみた。これは図書館のNDC分類法

に従って抽出している。NDC(日本十進分類法)新訂9版では(100哲学 200歴史 300社会科学 400自然科学 500技術・工学 600産業 700芸術 800言語)となっている。ここでは科学絵本をノンフィクションとして分類するため、0類(総記)と9類(文学)を除く1類(哲学)から8類(言語)までを分類する。かこさとし(加古里子)の全作品(NDL-OPAC 国立国会図書館の検索結果による)680件のうち本のタイトルより抽出した結果、合計208冊の科学絵本を分野別に分類してグラフ化する。

Fig.1(かこさとしの科学絵本の分野別分類 1~8類)によると、かこさとしの科学絵本は約半数を自然科学が占めており、残りの約3割が技術・工学で、約2割が歴史と産業を占めていることがわかる。後は社会、哲学、芸術の順となっている。自然科学だけでなく1~7類まで幅広い分野の絵本を作っていることがわかる。

Fig.2(かこさとしの科学絵本の分野別分類 4類)は400自然科学(96冊)の絵本を、さらに細かい内容別に分類を一覧にしてグラフ化したものである。その結果、490(医学)が最も多く次に450(地球科学)430(化学)と420(物理学)は同程度で、480(動物学)470(植物学)と続く。動植物はあまり多くはない。410(数学)と460(生物化学)は見られなかった。これにより、かこさとしの科学絵本の傾向として半分を占める自然科学の中でも、多いのは医学、地球、宇宙ということがわかる。これらのテーマを持つ福音館書店の科学シリーズ『海』『地球』『宇宙』『人間』は、かこさとしの科学絵本の代表作品であるといえる。

これらの分類を行うことで、かこさとしが科学のどのようなテーマを絵本にしたのか明らかになった。かこさとし自身の科学者としての専門は地球科学であるが、一番数多く絵本にしたのは、医学のテーマの絵本であったことがわかる。

3. かこさとし科学の絵本10巻シリーズ8作品

かこさとしの科学の絵本10巻シリーズは、あるものは出版社を異にししながら、1作目「かこさとしかがくの本」(1968)から8作目「かこさとしの自然のしくみ地球のちからえほん」(2005)まで、子どもに人間の体、心、食文化、自然科学などを伝える絵本として、37年間で合計8作品(シリーズ)80冊を刊行した。

哲学	歴史	社会	自然科学	技術・工学	産業	芸術	言語	(分類)
1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	(冊数)
16	22	17	96	31	19	7	0	(合計208)

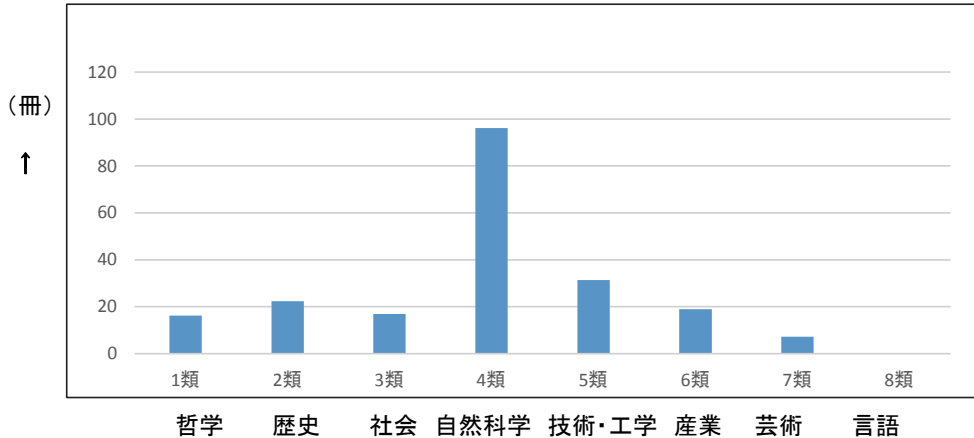


Fig.1 Classification of scientific picture books by Kako Satoshi by field (8 categories of the Nippon Decimal Classification To 8 kinds)

数学	物理学	化学	宇宙科学	地球科学	生物化学	植物学	動物学	医学	(分類)
410	420	430	440	450	460	470	480	490	(冊数)
0	9	9	13	23	0	4	8	30	(合計96)

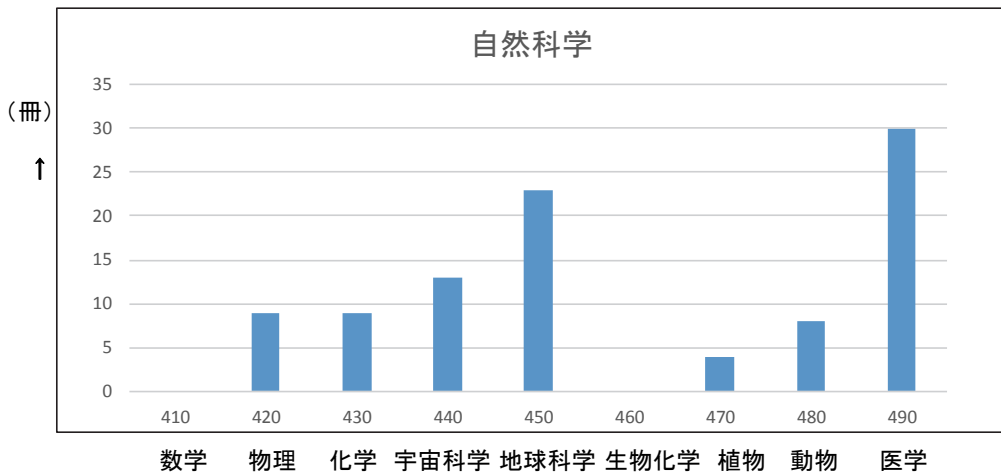


Fig.2 Classification of scientific picture books by Kako Satoshi by field (4 types)

各シリーズそれぞれ 10 冊の内容の特徴 (Table 1 : かこさとしの科学の絵本 10 巻シリーズ 8 作品を参照) と、かこさとしの科学の絵本が子どもに科学を

どのような方法で伝えているのか、またどう表現されているかを述べる。

Table 1 8 scientific picture books in the 10-volume set by Kako Satoshi

(分類: 日本十進分類法による。各シリーズは、初版の刊行順に列記。 テーマ: 子どもに伝えたい科学の内容(表現)について。)

巻数	タイトル (画家名)	テーマ	分類	巻数	タイトル (画家名)	テーマ	分類
シリーズ1、「かこさとし かがくの本」童心社1988(初版1968)				シリーズ3、「かこさとし こころの本」ポプラ社2005(初版1987)			
1	『ほくのいまいるところ』(太田大輔)	地球、宇宙	450	1	『うさぎくみとこくまぐみ』	障害を持つ子のクラス	140
2	『かわいいあかちゃん』(富永秀夫)	動物の育ち	480	2	『ねんねしたおぼあちゃん』	高齢の事実を伝える	140
3	『たねからめがでて』(若山憲)	植物の育ち	470	3	『でていったゴロタ』	非行児の心と親	140
4	『あるくやまごくやま』(宮下森)	山、地学	450	4	『トントンとうさんとガミガミかあさん』	母の病気、父の料理	140
5	『あまいみずからいみず』(和歌山静子)	化学、歴史	430	5	『おおきくなつたらなりたいなあ』	親不在の子、不和家庭	140
6	『ひかりとおとのかけくらべ』(田畑精一)	物理、光、音	420	6	『しっこのしんちゃんじまんのじいちゃん』	おねしょは成長の過程	140
7	『なんだかほくにはわかったぞ』(やべみつり)	材質の特徴	420	7	『よわむしケンとなきむしン』	幼児の心の動き	140
8	『よわいかみつよいかたち』	力学	420	8	『かわいいきいろのウジラちゃん』	仲間はずれから仲間に	140
9	『よこにきつまるいごちそう』(田中武紫)	立体、断面	420	9	『つかまえられたことりちゃん』	猫と動物の生態	140
10	『ちえのあつまりくふうのちから』(滝平二郎)	技術の歴史	590	10	『わたしのかわいいなミちゃん』	愛犬ものがたり	140
・幼児・児童の、科学的思考を育てる、このシリーズは、産経児童出版文化賞を受賞しSLA(全国学校図書館協議会)必読図書となっていることから学校教育に必要な絵本とされていたことがわかる。				・新版2005年を上記1～5の5巻に変更されていることがわかった。このシリーズにおいては子どもと親・先生・友だち同士の間で起る、様々な子ども心の動きを描いている。			
シリーズ2、「かこさとし からだの本」童心社2011(初版1977)				シリーズ4、「かこさとし たべものえほん」1987 農山漁村文化協会			
1	『あなたのおへそ』	生性について	490	1	『ごほんですよおもちですよ』(中沢正人)	お米について、歴史	590
2	『たべものたび』	体内の様子	490	2	『せかしのパンききゅうのパン』(栗原徹)	小麦、パンの歴史	590
3	『むしばミューダンスのぼうけん』	菌、虫菌	490	3	『うどのんのはなはどなんいろ』(高橋良己)	小麦の花、そばの花	590
4	『あかしらあおいち』	血液	490	4	『スープづくりあじしらべ』(谷俊彦)	汁類、とけた美味しさ	590
5	『はしれませかとおべますか』	骨、筋肉	490	5	『にくはちからげんきのもと』(森秀樹)	タンパク質の肉について	590
6	『てとどとびとど』	手、指、人類の祖先	490	6	『カツオがはねるマグロがおどる』(渡辺可久)	魚の生態、漁法	590
7	『あがりめさがりめだじなめ』	目の構造	490	7	『つみれのまほうとうふのにんじや』(大工原章)	加工した食品	590
8	『ほねはおれませくだけです』	骨の様子	490	8	『やさしいやさいのオアシンピック』(中村信)	旬の野菜の擬人化	590
9	『すてはいてよいうき』	肺呼吸	490	9	『リンゴのぼうけんバナナのねがい』(村松)	果物の産地	590
10	『わたしのうたあなたのこころ』	脳の様子	490	10	『ケーキつくりのおかしなはなし』(ガイチ)	家庭のお菓子作り	590
・子どもは、自分の体に関心を持つ、おへその意味や、赤ちゃんはどこから来るのか、怪我をして血がでると、疑問を持つ。子どもに、人間の身体のおもしろさを、理解し易く、ユーモアを交えて描いている。				・「ごほん」では稲作の今と昔、「パン」では世界中への広がり、「肉」では家畜と人間の歴史というように、食べ物の素材別にテーマを設定し、それぞれの自然性、風土性、歴史性などを子どもにわかりやすく表現している。			
・子どもは、自分の体に興味を持つ、おへその意味や、赤ちゃんはどこから来るのか、怪我をして血がでると、疑問を持つ。子どもに、人間の身体のおもしろさを、理解し易く、ユーモアを交えて描いている。				・「ごほん」では稲作の今と昔、「パン」では世界中への広がり、「肉」では家畜と人間の歴史というように、食べ物の素材別にテーマを設定し、それぞれの自然性、風土性、歴史性などを子どもにわかりやすく表現している。			
シリーズ5、「かこさとしのからだところのえほん」1988 農山漁村文化協会				シリーズ7、「かこさとし大 自然のふしぎえほん」2003 小峰書店			
1	『わたしがねむりねていたとき』(栗原徹)	睡眠と夢の話	140	1	『富士山大ぼうけはつ』	富士山の地誌、歴史	290
2	『びょうきじまやまいくらべ』	病気の種類、様子	490	2	『きみはタヌキモを知っているか』	食虫植物のいろいろ	470
3	『なきむしやさんだいいゅうごう』(野沢まりこ)	どんな時に泣くのか	140	3	『ヒガンバナのひみつ』	ヒガンバナの分布、毒	470
4	『すきなひとときらしいなわたし』(高橋良己)	人の信頼関係	140	4	『ダンスする魚のなぜなぜ?』	イトヨリについて	480
5	『おとうさんのおっぴなげあるの』	子どもの疑問に答える	490	5	『クラゲのふしぎ びつりばなし』	クラゲとサンゴの話	480
6	『いたいはいやだかゆいのごめん』(藤本四郎)	応急医療処置	490	6	『モグラのもんだい モグラのもんく』	モグラの生態と種類	480
7	『てのたんけんあしのぼうけん』(大久保宏昭)	手足のバランス	490	7	『台風のついでせき 竜巻のついきゅう』	台風と竜巻について	440
8	『いのちとからだのなぜなぜなんだ』(清原一真)	体の疑問に答える	490	8	『天地のドラマ すごい雷大研究』	雷のしくみについて	440
9	『こころときもちのなぜなぜなに』(沢田真理絵)	心の疑問に答える	490	9	『かいぶつトンボのおどろきばなし』	いろいろなトンボの話	440
10	『51にんのほく51にんめいほく』(大竹伸一)	障害のある子の問題	140	10	『大地のめぐみ 土の力大作戦』	植物と地中の生き物	460
・子どもの体や心に対する素朴な疑問や、悩みを通して、自分自身の体と心を、子どもの目線に立って見つめている。				・富士山の誕生から、食虫植物の不思議な虫の捕らえ方、ヒガンバナの毒の謎など、自然界のさまざまな現象、動植物の生態をわかりやすく解説し中・高学年向きである。			
シリーズ6、「かこさとしの 食べごと大発見」1994 農山漁村文化協会				シリーズ8、「かこさとしの自然のしくみ地球のちからえほん」2005 農山漁村文化協会			
1	『ご飯 みそ汁どんぶりめし』	お米の歴史、みそづくり	590	1	『やまをつくったもの やまをこわしたのも』	山のつくられかた	450
2	『ちり細うめん そばうどん』	多彩な種類について	590	2	『かわはながれる かわははこぶ』	川のしくみについて	450
3	『そろって鍋もの にっこり煮もの』	各地の鍋もの、煮物	590	3	『うみはおおきうみはすごい』	海の歴史、海の中	450
4	『うれしいフライ 天ぷら天下』	揚げもの種類、温度	590	4	『あめ、ゆき、あられくものいろいろ』	雨、雪、曇のいろいろ	440
5	『いろいろな食事春秋うまい』	各地の正月、季節料理	590	5	『さきやくかせうずまくかせ』	いろいろな風について	440
6	『たまごサラダごんぱん』	欧米の人々の日常生活	590	6	『じめんがふるえる だいちがゆれる』	地震のおこるしくみ	450
7	『だから元気ハム肉レバー』	栄養満点の肉料理	590	7	『ひをふくやま マグマのぼうけはつ』	火山のしくみについて	450
8	『きれいな果物あまから菓子』	お菓子の文化	590	8	『よあけゆうやけ にじやオーロラ』	虹やオーロラ、夜明け	440
9	『ままだ参りもいっぺいだいこん』	野菜の料理の仕方	590	9	『せかいあちこち ちきゅうたんけん』	地球の歴史、自然	450
10	『すし さしみ 貝かに塩焼き』	魚介類の調理法	590	10	『あさよる、なつふゆ、ちきゅうはまわる』	地球、太陽、宇宙	440
・自然につながり、世界に広がる豊かな食の世界。作物を育てて、運ぶ、売る、買う、料理する、食べるなどに関する様々なことを、絵本で楽しく表現している。				・山や海はどうしてできたのか、なぜ雲ができたか雨や雪がふるのか、台風がきたり地震や火山が爆発するのはなぜかなどを、子どもに、絵と文でわかりやすく表現すると共に子どもの防災意識にも触れている。			

Fig. 3（かこさとしの科学の絵本10巻シリーズの表紙例）は、10巻ともに文も絵もかこさとしの絵本となっている5つの作品で、それぞれ第1巻目の表紙である。後の3作品では文も絵もかこさとしの絵本も含まれているが、絵を他の画家に依頼している作品もある。これは編集者が、かこさとし自身に時間的体力的に無理がある場合に絵を他者に依頼するという方法をとったとされている。

3-1. シリーズ1「かこさとし かがくの本」全10巻（童心社1988）

初版が1968年に刊行されており20年後に新版を発行している。新版では画家を変更したり、科学の内容を新しい見解に直したり、随所に子どもに理解しやすい工夫がされていたりする。実際に子どもに読み聞かせを行った記録と分析を行ったものを後述する（Table 2）。



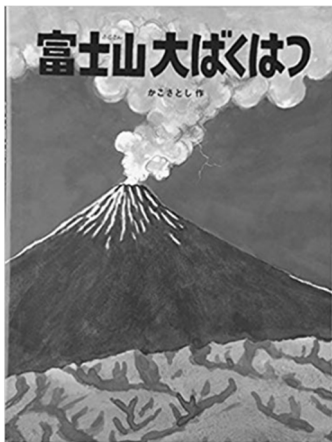
シリーズ2
「かこさとし からだの本」
『あなたのおへそ』



シリーズ3
「かこさとし こころの本」
『うさぎぐみとこくまぐみ』



シリーズ6
「かこさとしの食べごと大発見」
『ご飯 みそ汁 どんぶりめし』



「かこさとし大自然のふしぎえほん」
『富士山大ばくはつ』

シリーズ7



「かこさとしの自然のしくみ地球のちからえほん」
『やまをつくったもの やまをこわしたもの』

シリーズ8

Fig.3 The front covers of the set of 10 scientific picture books by Kako Satoshi

Table 2 Storytelling for children in lower grades

(1クラス30名)

日時	場所	学年組	『絵本の題名 ・子どもの声 ○質問、応答
2018. 3.15	図書室	2年1組	『よわいかみつよいかたち』 ○よわいかみつよくするには、どうしたらいいでしょう？ ・女子：おりまげる。こういうふうにおる。 ・女子：おもしろかった。
2018. 3.15	図書室	2年2組	『たねからめがでて』 ○どんなたねがありましたか？ ・男子：すいかのたね。 ・男子：かきのたね。 ・女子：おこめのたね。 ○ほかに、きがついたことはありますか？ ・女子：おこめができて、ごはんができる。
2018.3.15	図書室	1年1組	『たねからめがでて』 ○どんなたねがありましたか？ ・男子：すいか、かき、おこめ。 ・女子：えーっと、たんぼぼ。 ○ほかに、きがついたことはありますか？ ・男子：はたけがあった。 ・男子：たんぼぼの葉は、土がおいでないのに、何で芽がでたのかな。 ○たんぼぼの茎が土にくっついていませんか？ ・男子：たんぼぼの種が上から落ちてきた、根が出てきてる。
2018. 3.15	図書室	1年2組	『ぼくのいまいるところ』 ○どんなものが出てきましたか？ 男子：月、あの、地球ってさ、何かさ、行ってみたい。あ、まちがえた、星行ってみたい。 男子：知られていない所、いっぱいある。ぎんがとか、宇宙人。 男子：何で太陽の周りにさ、地球とか星とかまわってるの？ ○不思議だね、調べてみてくださいね。他に人？ 男子：地球の周りには大気はあるんですか？ 男子：ありにとってはさ、地球は、とっても大きい。 先生：ありからは、もっと違って見えるんだよ。
2018. 3.15	1年3組の教室	1年3組	『たねからめがでて』 ○どんなたねがありましたか？ 女子：かき、たんぼぼ、すいか、こめ。 ○：ほかに、きがついたことはありますか？ 男子：えっと、山の所で、お弁当食べてたら、かき落ちてさ、かき落ちてころがって、びっくりしたのがおもしろかった。 『ぼくのいまいるところ』 ○どんなものが出てきましたか？ 男子：何かこわい。何が出てきたって？東京タワーと富士山。 男子：セブンイレブン(笑) 女子：月。 男子：たいようけい。 男子：ぼく。 男子：はい！いぬ、にじ、地球、ママ。 男子：空がにじいろだった、星、雲、ごみばこ。 男子：ひこうき、きたちようせんのミサイル。 男子：ひと、家、金星。
2018. 4.12	図書室	2年2組	『かわいいあかちゃん』 ○どんな生き物が出てきましたか？ 男子：いぬ、かめ、おたまじゃくし。 女子：にわとり、めだか。 女子：あかちゃん ○何のあかちゃんかな？ 男子：人間のあかちゃん、きんぎょのあかちゃん。
2018. 4.26	図書室	2年1組	『かわいいあかちゃん』 ○いろんな生き物の、違っている所はどこでしょう？ 男子：えっと、やわらかいたまご、かたいたまごがちがった。 女子：たまごからうまれるのと、めすからうまれるのがちがった。 女子：自分でえさをさがすのと、おっぱいをのむのでちがう。 男子：いきものちがった。たとえば、かめとにわとり。
2018.4.26	図書室	2年2組	『あまいみずからいみず』 ○何か思ったことは、ありますか？ 先生：4年生に教えてあげたいです。 (読み聞かせ中の子どもの反応) ・絵本の問いかける文の所で、子どもは声に出して答えていた。 最後の文の、「海の水がからなくて、あまかったらいいと思いませんか。」の後で、多くの子どもたちから、「思う～」の声が聞かれた。

このシリーズは 10 巻シリーズの 1 作目であり、第 17 回サンケイ児童出版文化賞受賞、中央児童福祉審議会特選、全国学校図書館協議会選定、日本図書館協会選定という多くの注目を集めた作品でもある。子どもに科学の何をどのように伝えているのか具体的に作品ごとに見ていく。

1 巻『ぼくのいまいるところ』は大きな宇宙の中、地球の中、日本の中の小さな町にいる自分の存在に気付かせる。2 巻『かわいいあかちゃん』は、卵から生まれる生物と哺乳類の違いを述べて子どもに動物の進化の差異を表している。3 巻『たねからめがでて』は、花が咲き実がなる植物はみんな種でふえることを述べている。4 巻『あるくやまうごくやま』は山も大きな時の流れで見れば、時々刻々姿を変えていることを表現している。5 巻『あまいみずからいみず』では塩と砂糖をとかず実験から海の水がからいのはどうしてかまで言及している。6 巻『ひかりとおとのかけくらべ』では物理的な「光」と「音」を絵で表現することを試みている。7 巻『なんだかぼくにはわかったぞ』では材質の違いについて表している。8 巻『よわいかみつよいかたち』では力学上の紙の形による強度について作りながら気づかせる方法で表現している。9 巻『よこにきったまるいごちそう』は食べ物の断面図から立体感覚を育てている。10 巻『ちえのあつまりくふうのちから』では道具を使うことを知ってから、人類の進歩が始まったことを述べている。

科学のテーマとしては生物・地学・物理・化学の広い範囲でまんべんなく盛り込まれており、難しくなりがちな科学のテーマをページをめくるごとに物語り、親しみやすい絵で表現し、子どもの目線に立って書かれている所に特徴がある。

3-2. シリーズ 2 『かこさとし からだの本』全 10 巻（童心社 2011）

1 巻目の表紙が Fig.3 の『あなたのおへそ』で、子どもが興味を持つ「おへそ」が子を産んで育てる人間の基盤となっていることを述べている。「おへそとは何か？」という子どもが抱く疑問から、卵を産む動物には「おへそ」がないことと対比して表現し説明している。

亀津（2017）⁶⁾はこの「からだの本」10 巻シリーズと福音館書店の『人間』は、人間の身体の機能を扱った子どもに医学の基本を知らせる絵本として、医学的見地からの解説をおこなっていることを述べ

ている。「からだの本」シリーズの内容をさらに詳しくしたものが絵本『人間』で描かれていると説明している。

かこは、著書で「からだの本」10 巻シリーズについてこのように述べている。「ある時期になると、子どもは自分の体に関心を持ちます。そんな時、時間がたつとおしっこが出る、なぜだろうな、というような子どもの疑問にこたえ、興味をそそりたいと思います。」また、このシリーズを描くにあたって、出版社から「何か体の本を描いてほしいというだけの依頼だったのですが、それまでに調べたり資料を集めたりしていたテーマだったので描きました。」と述べている⁷⁾。

特徴としては、医学的内容を子どもの興味に基づきながら物語るような文章で、また問いかけを含む文で表現している所、専門的内容を子どもにわかりやすく親しみやすい絵で描かれていることなどがあげられる。

3-3. シリーズ 3 「かこさとし こころの本」全 10 巻（新版 5 巻 ポプラ社 1987-2005）

1 巻目（Fig.3）初版全 10 巻、新版全 5 巻（2005）に変更されたこのシリーズは、初版の 10 冊は図書館の閉架書庫から出してもらったものである。初版は 1980 年から 1987 年まで数年おきに刊行したものを 10 冊にまとめたものである。

内容は障がい児、高齢者、非行少年、病気、様々な家族と子どもの心の動きなどについて描かれている作品である。それぞれの絵本の特徴について、新版の 5 冊を述べる。

1 巻『うさぎぐみとこぐまぐみ』（Fig.3）では、健康な子どもと障がいを持つ子ども（この物語ではダウン症）が一緒にいる時、普通の状態ではいじめや仲間外れは起こらず、逆にいたわりや、かばいあうという行動になることが書かれている。ときに悪い状態になるのは、親や周りの大人が陰口や忌避する態度をとることが原因と述べている。2 巻『ねんねしたおばあちゃん』は、けがをした孫娘の面倒を一生懸命していたおばあちゃんが、ある日突然倒れて帰らぬ人となる。子どもにとって経験者であり、人生の辛苦を乗り越えてきたお年寄り、特に祖父母は、貴重な家庭の先達者ということがわかる。3 巻『でていったゴロタ』では、小学生のケンの兄コウタ（中学生）が、不良の仲間と付き合っていて、ある日お父さんと大喧嘩をして殴られる。兄は家出をしてイ

ヌのゴロもいなくなる。仲裁役のおじさんが、兄とゴロも連れて帰り、お父さんと話し合いをして和解する話である。

4巻『トントンとうさんとガミガミかあさん』では、ある日おかあさんが病気で入院する。田舎から来たおばあちゃんとお父さんは、ご飯やおかずを上手に作った。家庭生活の中で、特に料理は健康を確保するだけでなく、家族の団欒という子どもにとって大切なことを気付かせてくれる。5巻『おおきくなったならいたいなあ』この絵本では13人の子どもたちに大きくなったら何になりたいかを聞いている。中には親のない子や、片親の子、離婚、死別、また何不自由ない暮らしの中で母と祖母のけんかが絶えない家庭の子、病気の家族のいる子の様子などが書かれている。

家出した少年が家に戻るのは家族によってではなく、おじさん(子どもの相談にのる人)によってであることを示している。そしてこれは当時、地域の「セツルメント活動」の目指したこともあった。「非行の息子に父親が怒り、手を振り上げ、子どもが怒鳴り返す状況で、おばあちゃんがオロオロと顔をのぞかせると、どうなるだろうか? 友だち同士の大喧嘩の場に、障害のある子の無頓着な存在があると、どうなるだろうか? 激突、決裂という最悪の事態は避けられるだろう、気まづくなるかもしれないが、おばあちゃんや障害のある子どもは、その存在自体に大きな意味があることを気付かせてくれる」(各巻のカバーのそでの部分の「あとがき」)で述べているように、家族や集団の中で起こりうる問題の解決へ向けて、絵本を見る子どもたち自身で気づくことができるような試みがあるという特徴がある。

かこさとしの科学絵本の中で「こころ」のシリーズは特記すべき内容であり、子どもの心理の物語ともいうべきものである。絵と文で子どものさまざまな悩みや、悲しみや怒りなどを表現して、絵本を読みながら子どもと共に「こころ」を考えると同時に、この絵本の独自性があると思われる。

3-4. シリーズ4「かこさとしのたべものえほん」 全10巻(農山漁村文化協会1987)

「ごはん」では稲作の今昔、「パン」では世界中への広がり、「うどん」では麺類の製法・調理、「スープ」ではおいしさの秘密、「肉」では家畜と人間の歴史、「魚」では漁獲法から生態まで、「加工食品」では発酵やバイオ技術、「野菜」では旬の野菜について、

「果物」では味や香り色つやなど、「ケーキ」ではお菓子作りと正しい栄養についてなど、それぞれの自然性、風土性、歴史性を子どもに、絵本として楽しくわかりやすく表現している。尚10巻目の『ケーキづくりのおかしなはなし』以外は、かこの体調による事情で文はかこさとしであるが、異なった画家によって絵が描かれている(丸山2017)8)。

1巻『ごはんですよおもちですよ』では日本人の食生活の主軸として、長い歴史があるお米を、やさしく楽しく、また様々な調理法で、おにぎりやおすし、おもち、おかゆなどについて描かれている。

シリーズ4は食べ物を扱った絵本であり、かこさとしの科学絵本としては家政学の分野を子どもにもわかりやすく書いたものである。図書館の閉架書庫に眠っていた本であるが、内容が充実していて面白くそれぞれの食べ物の歴史、地理、植物としての説明もあり、調理法、加工食品を忍者を使って表したり、魚や肉はその漁や猟の様子まで描いていたり、子どもと一緒に食べ物の秘密を知る探検ができる読み物であり絵本となっているところに特徴がある。

1巻のあとがきに「この本のねらい」として、「子どもにとって食物とは、体と健康を保つ糧としてだけではなく、生活・文化・教育と結びつき、広く社会や世界へつながる物質である点が大切」と述べられている。日本人の主食であるお米に始まり、世界に普及しているパンと小麦の歴史や風土、文化に触れながら子どもに親しみやすい絵と文で作られている。

3巻の『うどんのはなはどんないろ』は異色の一冊である。「そばはそばの花からみえる」から「うどんはうどんの花からできる」と類推する演繹法の展開でラーメンやスパゲティの花はどんないろなのか、子どもに問いかけている絵本である。こうした疑問や合理性を大切にしながら、美味しさへの関心とともに正しい知識へ子どもを導くように描かれている。

このシリーズを小さい子どもたちが読めば、人間に必要な食の栄養素から、主食と違った豊かな心のゆとりを生む果物やお菓子までを知ることができる。またその原材料のもととなる動物や植物のところから物語って、知識にまで結びつける、子どもにとって「食」を総合的に見つめている所に独自性が見られる。

3-5. シリーズ5「かこさとしのからだこころのえほん」全10巻(農山漁村文化協会1988)

子どもの素朴な疑問や悩みを通して、体と心の関連を子どもの目線に立って書かれた少し変わった試みをしている絵本である。夢、いろいろな病気、泣くのはどんな時、好きな人の好きな理由、人の体の痛みやかゆみ、手足の動き、命と身体のかなぞなど、障がいのある子の話などが書かれている。

10 巻目の『5 にんのほく 5 にんめのはく』は足の悪い男の子の話である。子どもは大人と同じ身体的機能や感情を持ちながら伝達能力がつかないばかりに行動や感情表現の真意を大人に理解されないことが多いということを、障がいのある子で、普通の子どもの家庭での育児やしつけの原点を示してくれているところに独自性が見られる。

子どものための絵本であるとともに、大人が子どもを知る（子どもの頃を思い出す）本でもある。子どもの体に関するさまざまな思いを「からだところ」と題していろいろな例をあげて、その対応や考えなどを絵本で表現している。子どもにも理解の出来るさまざまな「身体と心」の問題を扱って、子どもと共に考え話し合える絵本であるところが独創的な科学絵本である。

3-6. シリーズ 6 「かこさとしの食べごと大発見」全 10 巻（農山漁村文化協会 1994）

「かこさとしのたべものえほん」(1987) シリーズから 7 年後、内容をさらに深め、自然につながり世界に広がる豊かな食の世界を表現した絵本である。作物を育てる、運ぶ、売る、買う、料理する、食べるなど子どもとともに「食」の世界を冒険しているような物語る文で書かれている。表紙に写真と絵(カット)を用いており、絵本としては珍しい試みである。中身はすべて、かこさとしの文と絵で料理も多彩な資料も書かれている絵本である。

1 巻 (Fig. 3) 『ご飯みそ汁どんぶりめし』には米や豆類などの穀物を使った料理や、みそづくり、納豆づくり、おもちゃ赤飯、酒づくりまで、雑炊やお茶づけなどについて材料や作り方が細かく絵で描かれている。

日本の長い歴史と生活、文化にささえられた、米の食文化といえるシリーズである。最終巻のあとがきに、かこは「描きおえた 300 枚の原画には、大小 800 種の食品、材料、料理をちりばめて、皆様方にみて頂きました。資料の収集を始めたのは 40 年も昔にさかのぼります」と書いている。気の遠くなるような準備である。

どの巻にも、食材の生物（動物、植物）としての所から、作り方、料理の種類、各地の料理、世界の料理、その巻の食材に関する様々な資料、盛り付け方、食べ方に至るまで、その知識を豊富な絵と文で場面ごとに描かれているのである。

また全巻にクイズが盛り込まれ、最後の見返しにクイズの答えが書かれており、子どもにとって楽しみの一つとなっている。

対象年齢は幼児から楽しめるが、小学校低学年の生活科での調べ学習に応用できる内容である。大人でも知らない専門的な知識も資料として、絵本の中に取り入れられている。まるで食文化の子ども向け参考書のようにもあるが、場面ごとのわかりやすい説明や、物語る文、ふんだんに描かれた絵(カット)を読み進めると大人も十分に楽しめる知識の豊富な所が特徴である。

3-7. シリーズ 7 「かこさとし大自然のふしぎえほん」全 10 巻（小峰書店 2003）

自然のしくみを、たくさんの絵で伝えている。富士山の誕生から未来、食虫食物の不思議な虫の捕らえ方、ヒガンバナの毒の話など、自然界のさまざまな現象、動植物の生態を、子どもに楽しくわかりやすい文で伝えている。

全ての巻にそのテーマの歴史的な背景が、絵本の中にも含まれている。2 巻以外の巻には、地理（分布地図）を入れている。自然科学の絵本の中に社会科学の内容も含めて描いていることがわかる。多角的な視野に立った、小学校中・高学年向けの絵本である。

1 巻 (Fig. 3) 『富士山大ばくはつ』では、噴火の歴史と富士山は若い火山なのでまた噴火を起こす可能性があること、再び噴火したら周辺はどうなるかその時の防災対策などが書かれている。また富士山の自然、川、湖、雲、昆虫、動植物までたくさんの絵で描かれている。2000 年に小学校中学年の課題図書になった。

5 巻『クラゲのふしぎびっくりばなし』を書くにあたって、かこはクラゲの生態について、江の島水族館に専門家の話を聞きに行った。原稿に誤りが見つかり締め切りぎりぎりになっても「これで真実がわかり書きやすくなった。」と喜んだというエピソード（小林）がある⁹⁾。

これらの作品は、かこが自然の中から取り上げたいと思っているテーマについて資料を集めたり、調

べたりしてから子どもにわかりやすい文と絵で、語りかけるように自然界の話をしている。科学に様々な絵と文でストーリーを持たせて子どもに語ってゆく表現方法は、かこの科学の絵本の特徴であるといえる。

3-8. シリーズ8「かこさとしの自然のしくみ地球のちからえほん」全10巻（農山漁村文化協会2005）

1巻（Fig. 3）『やまをつくったものやまをこわしたの』では、山がどうして高くもりあがりできたのか、そして動かないように見える山も、休みなく形や姿を変えていることを、断面図を用いて描いている。3巻『うみはおおきい うみはすごい』では陸の2倍も広い海や大きな波ができたり、川のように流れてもいる様子が描かれている。地球最初の生物が生まれたのも海である。数値は最新の理科年表を参考にしてしている。海の底には山や谷、丘や盆地、火山や温泉などが水の中でそろっている。この巻は小学3年国語教科書（学校図書）に「ひらけてゆく海」として掲載された。

かこさとしは「この『自然のしくみ 地球のちから』シリーズは、自然の現象変化や地球のさまざまな活動の起こる原因や理由を、ちいさい読者に伝えるためにつくりました。」と述べている（1巻「あとがき」より）。

前作の「大自然のふしぎえほん」シリーズは、小学校中高学年向きであるのに対して「自然のしくみ地球のちからえほん」は幼児や小学校低学年向きで文章も大きめの文字のひらがなとカタカナで書かれており、絵もやさしくゆったりしたタッチで描かれているところに特徴がある。しかし内容については本格的で、見返しの部分には、地図や分布図、世界の川の長さや山の高さなどが、数字で書かれていたりする。自然の様子を大型絵本で、臨場感のある絵画で表しているところが独自のである。

4. 「かことし かがくの本」シリーズの子どもへの読み聞かせ

かこさとしの科学絵本は、保育園や小学校で多く読み聞かせが行われており、

人気のある絵本である。「かこさとし かがくの本」シリーズは対象年齢は4歳から8歳となっている。

今回の実際の読み聞かせでは、「かこさとし かがくの本」10巻シリーズのうち、『ほくのいまいと

ころ』『かわいいあかちゃん』『たねからめがでて』『あまいみずからいみず』『よわいかみつよいかたち』の5冊を使用する。これらの5冊は、筆者が子どもに読み聞かせを行っていて、自然科学の内容として最も低学年児童に受け入れられやすい科学絵本であると思いついたものである。

（方法）

期間：2018.2.8～2018.4.26

場所：小学校図書館（東京都江東区立）

対象：低学年1年3クラス、2年2クラス（1クラス約30名）

読み聞かせ：最初に一冊絵本を読み聞かせした後に、質問を行い数名にこたえを言ってもらう。（ボイスレコーダー使用）

質問事項：子どもが思ったことや、言いたいことを自由に発言できるような質問にする。

子どもの発言を表にまとめ、分析を行う。これにより「かこさとし かがくの本」の読み聞かせによる子どもの反応を見る。

Table 2（低学年児童への読み聞かせ）による子どもの答えから、各巻の子どもへの反応の特徴をとらえる。

『よわいかみつよいかたち』は、女子の方に関心が強かった。（聞きに来た人数が女子の方が多かった。）『たねからめがでて』の3クラスの読み聞かせでの共通点は、どんな植物（食べ物）の種か言い当てることができたこと。お米のたねは3クラスとも言い当てていた。相違点は、2クラス目で植物（たんぼぼ）の特徴（葉や茎や根）に気づく子どもがいたことがあげられる。

『ほくのいまいとところ』では、子どもたちの答えに「つき」「ちきゅう」「たいようけい」「ぎんが」「ほし」「たいよう」「たいき」「にじ」「きんせい」などの言葉が多く見られたことから、地球や宇宙に関心を持っていることがうかがえる。1クラス目では、「星、行ってみたい」「何で太陽の周りに、地球とか星とかまわってるの」「地球のまわりには、大気はあるんですか」など、宇宙に対する子どもの好奇心を知ることができた。

『かわいいあかちゃん』では、2年生2クラスに行ったところ、1クラス目の子どもの答えが、生き物の名前のみにとどまっていたため、2クラス目には、質問内容を変えて「違っている所」を聞いたと

ころ、生き物の生態にまで気づく答えが返ってきた。これにより子どもへの質問内容に気を付ける必要があること、子どもは読み聞かせで、生き物（卵から生まれる生物、哺乳類）の違いを理解できていたことがわかる。

これら 5 冊（シリーズ 1 「かこさとし かかくの本」）の科学の絵本は子どもにとって、創作物語の読み聞かせと異なり科学の内容を理解することができ、いろいろな疑問を持って聞いていたと考えられる。また読み聞かせを行った絵本は先生方にも興味をもたれていて、このような科学絵本をもっと読み聞かせしてほしいという申し出があった。理由は生活科の授業に役立つからということである。

5. かこさとしの科学の絵本 10 巻シリーズの独自性や独創性

かこさとしの科学の絵本 10 巻シリーズは、全部で 80 冊の科学絵本であり Fig.1 と Fig.2 に示される、かこさとしの科学絵本合計 208 冊中約 4 割を占めている。

これらは NDC による分類では 1 類（哲学）4 類（自然科学）5 類（技術・工学）に含まれている。「こころ」に関する 2 つの作品は 1 類に含まれている。「食べ物」

に関する 2 つの作品は 5 類（家政学を含む技術・工学）に含まれている。他の 4 つの作品は 4 類（自然科学）に含まれ、医学や地球科学、植物学、動物学、宇宙科学などに関する絵本となっている。

結果としてこの 10 巻シリーズは、かこさとしの科学絵本 208 冊の特徴でもある Fig.1 のように 8 作品中 5 作品は、4 類の自然科学に属していることがわかった。

さらに自然科学の中のテーマとして Fig.2 のように医学と地球科学について書かれた作品が多かったといえる。

かこさとしの科学の絵本 10 巻シリーズ 8 作品の特徴として、この 80 冊に及ぶ絵本の中で多数の作品に見られた特徴、独自性、独創性として次の 8 つの事柄が考えられる。①広い視野に立った総合的な内容で、自然科学だけでなくその歴史性、社会性という社会科学的分野の内容も一冊の絵の中に入れていいる。②子どもに正確さ、真実をつたえるために、多少難しい内容や言も絵本の中に入れていいる。③「遊び心」や「ユーモア」を入れて子どもが科学絵本を

読むときに無理なく理解できるように、興味や関心を喚起するしかけが随所にみられる。④さまざまな科学のテーマを扱う絵本をかいている。(自然、食べ物、人の心身など) ⑤「物づくし」の絵が描かれている場面が多く存在する。⑥「断面図」という手法を取り入れていて、特に大自然のしくみや人の体の中などに見られる。⑦作品を通して科学を子どもに問いかけ、また物語性をもたせて語りかけるという方法を使っている。⑧実際に子どもに読み聞かせを行ってみると、さまざまな科学への気づきがみられた。

かこさとしの科学の絵本 10 巻シリーズは、参考書や事典にあるような専門的な内容を書きながら、参考書や事典とは異なり「ページをめくるごとにストーリー性を持たせて科学を語りかけている」もので、また「遊び心のある絵や物づくしの絵本」であることがわかる。図鑑や事典にはないストーリー性によって、実際に子どもに読み聞かせを行うことの出来る科学の絵本になっている特徴がある。

これらの自然科学の作品の中に、日本だけのことではなく地球規模の危機となるであろう未来の災害問題に、子どもたちが関心を持つように絵本の中に問いかけのような文で書かれている所に独自性が見られる。例えば自然災害が起きる原因、地震、雷、台風などのしくみを述べて、子ども自身自分の体は自分で守れるように、わかりやすく絵と文で書かれている所がある。子どもに科学を、人間の生活にとっても大事なものとして気づき自ら考えられるように、作品の中に工夫が見られる所に独創性が感じられるのである。

また 10 巻シリーズの中で「こころ」を扱っている 2 つの作品は、かこの科学の絵本の中では特記すべき内容のものである。子どもの暴力や非行は今日の教育問題のひとつでありその要因となり引き金となる行為や考えは、子どもの周りに存在する仲間や大人と関連がある場合が少なくないことを絵本の中で示している。身近な親や大人たちの「こころ」を失った乱れた行為は、子どもを非行に走らせてもおかしくないような問題点を指摘しているのである。このシリーズは子どもと親、子どもと先生、友だち同士の間で起こる様々な問題や、子ども自身の心の動き、心と体の関係などを書いた絵本であるが、科学絵本としては新しい分野である「こころ」の問題を絵本で表現するということに独創性が見られると

考える。

おわりに

かこさとしは、幼年時代にトンボを追いかけて、野山の虫や魚たちを遊び友だちとしていた頃の実体験に基づいて『かいぶつトンボのおどろきばなし』を作り上げた。これら幼少期の体験は絵本を作り上げる上で貴重な資料となっているといえるであろう。

かこが小学3年生の時、自然災害のあった地方に送られる救援金活動があり、その救援活動をしているときに、あるおかみさんから聞いた話から作られた絵本に『ヒガンバナのひみつ』がある。絵本の見返しにヒガンバナの地域による名前の違いを、県別に608種類もの名前を集めて記されているのは、徹底した探求心によるものである。

また雷のメカニズムをシャツの静電気、電車のパンタグラフ（集電装置）など身近な例で豊富なイラストを交えた絵で表現しているところなど、子どもに理解されやすいようにという配慮が見られる。

かこは、戦後たびたび来襲する台風とその水害の救援の手伝いをするようになってから、気象や天気の変化に関心を持つようになり作られた作品が『台風のついせき竜巻のつきゅう』である。ものすごい力を持った大自然の台風から人間は何ができるのか、どうすればいいのか、その対応が問題なのだというのを、絵本を通して子どもに気づいて考えてもらおうとするところに独自性が見られる。

かこが20代の頃、戦後間もなく戦火で家を無くした家族も多かった時期に、家をつくる夢をミノムシやカタツムリの童話にたくしていたとき、巣を作る魚（イトヨ）のことを知った。この巣を作ったり、ダンスをしたり普通の魚と違った暮らしをするイトヨという魚の生態を紹介した絵本に『ダンスする魚のなぜなぜなぜ?』がある。この絵本を作っているときにかこは、オランダのノーベル賞動物学者ティンバーゲンを知る。ダンスするこの小さな魚（イトヨ）から命を受け継ぐしくみ、生物の本質や人間の生き方にも及ぶ研究だったことから、その後20年以上かこの心の支えとなったという。この絵本にはそれらの命の奥深さにも触れる内容が、独自の絵と文で綴られている。このような創作過程で得た新たな知識や知見をも書き入れるという方法は、かこの創作における特徴であり独創的な手法といえよう。

かこ自身述べているように作品の内容が20年は

持つように、常に専門家の知見を加え絵本を作成している。科学の絵本は子どもに科学の気づきを与え、興味を喚起し自ら考えることが望ましいとしている。かこさとしの科学の絵本10巻シリーズは、科学の専門性を備えつつ子どもに問いかけたり物語る文章で、子どもの科学への気づきや興味を持たせようとする様々な工夫が一冊一冊の絵本に施されていることが明らかになったと思う。

付記

本稿は、第22回絵本学会大会（2019年6月2日於、帝京大学八王子キャンパス）における口頭発表に加筆修正したものである。

注

- 1) 鶴飼宏明／編著者 演劇研究会『東京大学・演劇七十五年史—岡田嘉子から野田秀樹まで』（清水書院）1997年 発行者／東京大学演劇同好会「夜の小人」1948年公演プログラム所蔵（本郷演劇）の中の「どろんこ道」（詩）p.320に本名（中島哲）で記載されている。
- 2) 鈴木万里（加古総合研究所、講師、かこさとしの長女）が講演会「かこさとし創作の原点」（藤沢市総合市民図書館ホール）にて述べている。
- 3) 大中恩（おおなか めぐみ）は作曲家で「いぬのおまわりさん」「サっちゃん」などを作っている。
- 4) 1962年「亜炭酸化生成物を基体とする土壌改良並びに肥料に関する研究」
<https://Wikipedia.org/wiki>(2018.10.17)
- 5) <https://www.amazon.co.jp/gp/bestsellers/books/501008>(2018.12.03)
- 6) 亀津絵里（医師、かこさとしの次女）が「文藝別冊かこさとし」pp. 104 - 110 河出書房（2017.7. 30）で述べている。
- 7) 加古里子『絵本への道』福音館書店（1999）自身の作品を遊びの世界から科学の絵本へ創作の道のりについて具体例を挙げながら述べている。
- 8) 担当編集者の丸山良一は「実は、『たべものえほん』は、かこさんのご体調のこともあり、10巻中9巻で絵を他の画家さんをお願いしています。」（『現代思想』vol.45-17 青土社 2017p.48）と述べている。

9) 担当編集者の小林美香子に直接インタビューを行ったところ、締め切りに間に合うかぎりぎりであったが、小林も同行した江の島水族館で、かこは真実の確認ができたことを喜んでいたのである。

参考文献

- ・加古里子：『だむのおじさんたち』福音館書店 1959, 『海』福音館書店 1969, 『はははのはなし』福音館書店 1970, 『ならの大仏さま』福音館書店 1985,
- 『ピラミッド』偕成社 1990, 『万里の長城』福音館書店 2011, 『地球』福音館書店 1975, 『宇宙』福音館書店 1978, 『人間』福音館書店 1995, 『私の子ども文化論』あすなろ書房 1981, 『絵本への道』福音館書店 1999
- ・栗原一樹他：現代思想「総特集*かこさとし」青土社 2017vol.45-17
- ・渡辺史絵他：文藝別冊「かこさとし」河出書房新社 2017

